元伊勢両宮（但波乃吉佐宮 與佐之小見比沼之魚井原宮）の研究　吉佐宮篇　上

元國學院大學教授
小野祖教

皇大神丹波迁幸　発見史証

・御田口祠

六人部是香著「校正古丹後風土記」全の「丹後風土記」より。

（原）御田口祠者往昔天照大神分霊子豊宇気大神猶レ照二臨于国土一丹波国造日本得魂命等便以地口之御田奉。

矢野玄道云天孫本紀謂倭得玉彦命蓋此人耶其娣為瑞籬宮皇妃則与下文所云同日子坐王襲賊符。

（訂）御田口祠者。往昔。天照大神分霊。与二豊宇気大神一。猶照二臨于寓内一雙時。国造日本得魂命等。便以二地口之御田一奉。

寓内。天下カ雙時。坐時カ

更建二校倉一蔵二其穀実一也故名阿勢久良奠二其倉一以称二御田口祠一

一、はじめに

一、元伊勢両宮の由緒

皇大神社は、京都府加佐郡大江町字内宮に鎮座している。祭神は天照皇大神で、元伊勢内宮と通称し、太神宮（だいじんぐ）とか、丹后内宮とか、元伊勢皇大神宮とか、時々により、いろいろに呼ばれて来た。

神道五部書にいう但波乃吉佐宮の神蹟として、崇神天皇卅九年に皇女豊鋤入姫命が皇大神を奉じて、ここに四年の間奉斎した処だと伝承されている。神域を宮山と云う。

神域の総称を宮山と云う。本殿の御垣内は海抜約百十米にある。背後の山を高津子峯と云い、海抜二百二九米ほどである。北に、同じ位の高さの山が数峯相並んで、高低の少い稜線を作っている。

高津子峯の西側面を日浦と云い、相対する山を日室ケ岳とも城山ともいう。日室岳は海抜四百二七米で、美しいピラミット型をなして居る。神の降臨するところとして、禁足の掟が守られている。いわゆる神体山である。

日室岳と日浦との間の幽谷を天岩戸と称し、天岩戸神社が鎮座して居られる。天岩戸神社は、櫛石窓神、豊石窓神、八意思兼神、大宮売神の四神を奉斎する。

この神域一円を岩戸山と云う。京都府から、歴史的自然環境保全地域の指定を受けた。

内宮皇大神社に対偶するのが、元伊勢外宮と通称される豊受大神社である。社地を舟岡山と云う。海抜三二米ほどの低い山丘である。内宮の宮山や、岩戸山に比すると高さと広さに於いて劣るが、立派な森叢をそなえている。

同じ大江町の天田内区内に鎮座して居られる。内宮との間隔はほぼ三粁である。天岩戸を通る宮川が、両社をつないでいる。

外宮豊受大神社は、皇大神の吉佐宮迂幸に当り、天より降って、一処雙座し給うた御饌都神の止由気太神（豊受大御

神）を祭った与佐之小見比沼之魚井原の神蹟だと伝え、雄略天皇の廿二年、皇大神の神勅に依り、止由気太神をここより、伊勢の度会の山田原に迁し祭ったのだと伝えている。

両宮とも、江戸時代には、宮津藩主の崇敬が篤く、三丹を中心として伊勢講が組織され、多数の太夫（皇大神社は、内宮区三三軒二俣区三二軒）がいて盛に巡回祈祷を行い、門前町が発達した。

両宮の繁栄は明治時代までつづいた。鉄道が開通し、由良川の舟運が衰退するにつれて、交通の流が変り、次第に繁栄を失い、終戦を契機として、参拝者も殆どなく、一時は、疲弊し、荒廃の極に達した。

元伊勢両宮が奇蹟の復活を見るに至ったのは、自動車交通の発達と深い関係をもっている。昭和三十年頃から、戦後の経済復興がはじまり、高度成長時代に入る。元伊勢両宮も、昭和四十年頃から、参拝者の数が上昇する徴候が現われて来た。私が、宮司を拝命した当時（49年末）、当社は、荒廃の極に達していたが、社頭整備に微力を尽すことによって、復活の速度を早める事が出来て、加速度的に根強い底力を発揮し出した。

天の時を得た為めか、地の利が幸いしたのか、皇大神の神蹟という伝承と、神秘にみちた神域林の異色さが、稀少価値として輝いて、口から口へ伝わり、人が人を呼んで、桃李言わず下自ら径をなすの諺にたがわなかった。珍らしい現象である。

時が来たのだという感が深い。

参拝する人は、厳かな森のただずまいに心打たれて、皆、納得して参拝して行かれる。その点では、問題はない。

しかし乍ら、古い神社は、元初にさかのぼっての歴史の研究が求められる。十分資料があるところも、無いところもあるが、明治以来、社格制度（終戦で廃止）が設けられて、国家制度上、待遇の規準があった。高い待遇を受ける神社は、文献等、十分、歴史を明らかにし得る資料が必要であった。社格制度のことは、今日では知らない人がある。念の為め、又参考の為め記すと、次の如く級別されていた。

官幣大社　官幣中社　官幣小社
国幣大社　国幣中社　国幣小社
別格官幣社
府・県社　郷社　村社
無格社

社格は、国家が、神社明細帳という社籍簿に登載する上で必要なもので、公の取扱についての別があった。別格官幣社までは、国が直轄し、府・県社以下は、地方公共機関が管轄することになっていたが、ここでは、詳細は述べない。

元伊勢両社の場合、十分な考証資料があれば、当然、相当高い社格に列せられるべき由緒なのだが、全くと云ってよいほど国史官牒古記実録に徴すべき、古い文献資料が無く、考証上のハンディキャップを負っていたので、取あえず一番低い村社に列せられた。地元民が、官幣大社に列格して頂きたいと運動したが相手にされなかった。昭和五年に、宮地直一博士が考証課長として実地調査して、ようやく府社に昇格、社格制度が廃止されるまで、府社であった。

ここの場合は、神社にも地方にも史料が無く、室町・戦国の頃にかすかに歴史にあらわれて、徳川時代になって、藩公の篤い崇敬を受け、参拝者も全国から訪れるようになったが、元初の真実を証するに足る古い資料が全く発見されなかった。

然し、放って置ける問題ではない。

伊勢の皇大神の最初の迂幸地でもある。その時に、一処雙座した御饌都神の止由気太神が、雄略天皇の御代に伊勢国度会の山田原に迂祀されて、外宮豊受大御神として奉斎されて居る。その時に丹波から迂された真井の御井の御水

で、日別朝夕大御饌祭がたゆる事なく行われている。

その豊受大御神の神蹟の証明がつかない、吉佐宮の証明もできない、国家も適切な方法がとれない。そのまま終戦を迎えたので、戦後、一時神慮をなやますような状態に陥った。これは、看過し得ない由々しい問題である。

この研究は、そんないきさつをもつ難しい問題に挑戦して、何とかして、確実な証明を与えようという、おおけない試みである。

こんな状態であるから、丹後地方では、真名井論争とよばれる論社の競合もあった。現在も、新らしい論社が現れて、問題を提起している。困難でも、何とか解決しなければならない必要に迫まられている。

幸い、奇跡の発見もあり、思いがけない証拠も出て来た。余りよく研究されなかった丹後風土記残欠もある。最近、海部穀定氏によって、内宮本「倭姫命世記」や、「勘註海部系図」等、秘められていた資料も公開された。故に、今は、研究にそれほど事欠かない。

新生面が開らけた。

皇大神の御迂幸地は、「倭姫命世記」にくわしい。最初に、八咫鏡を宮中から出し奉って、磯城神籬をたてて祭った大和国の笠縫邑から、最後に御鎮座になった伊勢国度会の伊須々河上宮をも加えると、御関係地は、合わせて、廿五ヶ処になる。

天照大神御遷幸の宮処

倭国の笠縫邑

一、丹波国吉佐宮（与佐宮）　二、倭国伊豆加志本宮　三、木乃国奈久佐浜宮

四、吉備国名方浜宮　五、倭国弥和乃御室嶺上宮　六、同国宇多秋志野宮

七、同国佐佐波多宮　八、伊賀国隠市守宮　九、同国穴穂宮

十、同国敢都美恵宮　十一、淡海国甲可日雲宮　十二、同国坂田宮
十三、美濃国伊久良河宮　十四、尾張国中嶋宮　十五、伊勢国桑名野代宮
十六、同国奈具波志忍山宮　十七、同国阿佐加藤方片樋宮　十八、同国飯野高宮
十九、同国佐々牟江宮　二十、同国伊蘓宮　二十一、同国大河之滝原宮
二十二、同国矢田宮　二十三、同国家田田上宮　二十四、同国伊須々河上宮

表にすると、何もかもわかっている様に見えるが、実は、殆どが、学問的にはわからない。問題のある所が多い。

二、研究の要領と帰結

二つの方法論

（地理学的考証と古代的価値観の復元）

新証拠の発見

（皇大神丹波迁幸に関する丹波側上氏伝承―丹波風土記残欠）

吉佐宮日出の奇麻知の発見

与佐之小見比沼乃魚井原とそのキメ手

吉佐宮にしても、与佐之小見比沼之魚井原宮にしても、従来の資料と方法だけでは、何人にも施す手はなかった。私が、試みたのは、地理学的考証という方法である。実際は、地理学的考証が用いられた例は多いと思う。だが、文献のない所で、積極的に、且つ意識的に用いた例は少いかも知れない。地理学的考証という用語も、耳なれない。結局、現地の地理が示す条件や状態が、文字に書かれていないものを語りかける。これを手がかりとして、考証するのである。私は、これが非常に有効な場合があり、必要な場合があると考える。

第二には、価値観の倒錯から来る目の中の鱗を取払うことである。時代と社会とで、価値観がちがう。これは当然

な事だが、意外に、後世の物指で、古代を推しはかっている事が多い。

ここの場合、書紀紀年で、千五百年も、二千年もの昔の、文献のない時代の問題にかかる。口誦伝承の時代の事である。文献に残るなどと云う事は偶然に近いケースである。ところが、吉見幸和などは、重要な事だから、必ず国史官牒古記実録に残るべきものだと頭から、それを物指にした。

これは、価値観の倒錯であろう。古代の人々が、「秘」を重視したことを忘れたら、わからなくなる事がある。私は、いろいろな事から、「秘」を守っている例を学んだ。「秘」を固く守ったらどうなるか。「秘」は存在しないと、きめる訳にはゆかない。それを守り通したところがあれば、事態は全く変るだろう。

「秘」だけではない。たとえば、現人神などは、現代の人間には現実的なものには思えないが、古代にあっては、普通の事だった。現代でも、どこかの社会では現実に生きているのが事実である。

云われて見れば、別に、異様な事を云っている訳でも、考えている訳でもない。今の人なら、すぐ、わかってもらえる事だ。価値観の倒錯から脱却して物を見直す。これは常識である。そういう点に留意して、正しく見ることに努めた。

然し、この研究では、奇蹟を感じることが多かった。

「吉佐宮日出の奇麻知」という現象を発見したのは、どう考えても、神助だった。時が時、所が所、事が事だった。目に見えない方向線がハッキリ見えた。それが、吉佐宮の神秘の謎を解く鍵だった。

丹後風土記残欠との出会い。この文献は、この研究には不可欠である。余り広く知られていないこの残欠を、私はこの年になるまで知らなかった。ところが、偶然、しかも、ピッタリ、必要な時にこの文献に出会った。

幾つもの重要なことが、この残欠の中に書かれていた。特に、重要なことは、伽佐郡「御田口祠」の条だった。一字誤字があった。「与」とあるべき所が、「子」となっていた。

すると、六人部是香翁が、苦心して埋めた蠹食の五字が、誤っている事が発見された。それによって、この二行が、非常に貴重で、皇大神の丹波迂幸、二神の一処雙座に関する丹後側の上代伝承である事に気付いた。

幸和の皇大神丹波迂幸虚妄説をくつがえすに足る新発見だった。

海部穀定氏の「元初の最高神と大和朝廷の元始」の出版も奇蹟的だった。氏は、本年(六十年)九月末に逝去された。この書は、五十九年十一月十日に発行された。私は、一応原稿を書上げ、推敲の上脱稿しようとしていた時、この書物に出会った。

私と氏とは、殆ど学説的にはちがっている。しかし、氏が、秘蔵の資料を公開してくれた為めに、いろいろな疑問が解消した。

伊勢の資料による豊受大神の祭祀系譜と、丹後資料による豊受大神の祭祀系譜とのちがいがハッキリした。

内宮本「倭姫命世記」の公開も貴重なものだった。これと、氏が引用した「延暦儀式帳」「大同神事上代本記」「延喜度会氏本系帳」とによって、止由気皇太神の丹波の神蹟を、「与佐之小見比沼之魚井原」としぼり込むことが出来た。

氏の逝去が、一年早かったら、私の研究は甚だ不十分なものに終った筈だった。危機一髪だった。

今年(六十年)の三月、私は、一度提出した原稿を、もう一度、検討する機会を与えられた。いろいろな事情で、完成がおくれた。その間に、重大な発見があった。豊受大神の魚井原宮考証のキメ手の一つと考えられる内宮の港石との出会いである。基盤整備工事着工の三日前だった。これも危機一髪だった。

もう一つ。本年(六十年)一月二日、衝動にかられて、与謝(里)の視察に行った。思いがけなくも億計王(仁賢天皇)、弘計王(顕宗天皇)を祭る上宮神社、下宮神社に出会い、初詣をした。雄略天皇の御代、二王子がここに亡命して居られたことを知り、当時の与謝と、与佐之小見比沼之魚井原宮との関係を考える手がかりを得た。

どうして、こんなにチャンスに恵まれる事が出来たのか。不思議な出会いばかりだった。転げ込んで来るように、或は、引きよせられるように、ぜひ、欲しいものに出会うことが出来た。奇跡だと信じない訳にはゆかない。

吉佐宮については、二つの重要ポイントがあった。一つは、果して、皇大神の丹波御迂幸の事実を証明する事が出来るかどうかだった。思いがけなくも、丹後風土記残欠に、丹後側の上代伝承があって、五部書の外に有力な証拠が出て来た。第二は、元伊勢内宮皇大神社が、果して、吉佐宮であるか否かを確認する必要があった。

全国にも稀に見る神秘な神奈備の森と、与謝里とが、何らかの関係をもつ事の証明が欲しかった。今日まで、与謝里に着目した人がいない。大江山を挾んで、西と東に離れている二つの土地が、「吉佐宮日出の奇麻知」の秘線で結ばれている事がわかると、不思議に、悠遠の古代が見えて来た。

止由気太神の神蹟は、資料の関係で、殆どの人が、丹波郡＝中郡伊去奈子岳の方に目を向けていた。しかも、真名井論争が行われたが、キメ手を欠いていた。今度、いろいろな資料が出揃った関係で、丹後側伝承豊受大神祭祀系譜と、伊勢伝承豊受大神祭祀系譜を分つ事が出来るようになった。伊勢伝承では、「与佐之小見比沼之魚井原」という神勅の神語が、決定の鍵をにぎって居り、比沼には、氷沼道主という現人神が鍵をにぎっていた。真井の石井に鎮め移し居えた真井の水を水戸神が守ったというヒントがあった。水戸神を港神と解釈して、淡水、即ち川の港に目を向けると、二つの港石と、一つの錨場と、二軒の舟宿が証明を与えてくれた。

かくて、立ち罩めていた霧が霽れた。謎の扉は開けられた。

二、根本から見直す

——別の価値観から見る——

(一) 元伊勢の森

イ、何事のおはしますかは

元伊勢を知らんとせば、森を見よ。森に聞け。

誇張ではない。

古い名神大社は勿論だが、名も知らぬ里の叢祠に於いても、森は大切にされている。

万葉の昔から、杜と云ったら神社の事だった。その伝統は、今もよく守られている。

元伊勢内宮の森、日室岳を中心とする岩戸山の森、その厳かさ、その神秘さは、どこに較べても見劣りしない。太古のたたずまいが、満ち溢れている。

何事のおはし坐すかは知らねども

西行法師は、ここに来ても、同じ歌を詠んだだろう。神宮は、隅から、隅まで、何となく神々しい。

かつて、マールブルヒ大学の教授だった故フリードリッヒ・ハイラーが、神宮に参拝して、感歎して、ここには神が生きていると云った。どうして日本人は、こんな宗教施設を生み出したのか、もう一度、日本に来て、研究して見たいと云っていた。

私は、フルダのホテルで、三笠宮のお相手当番だったので、ハイラー教授夫妻と、打ちとけた話をする機会があった。この話を持出すと、彼は、ぜひもう一度、ゆっくり日本の神社を訪ねて、日本人の宗教心を知りたい。しかし、先立つものが無いとネと、おだやかに笑って見せた。彼は、追体験を重んずる学者で、宗教的偏見をすてて、いろいろな宗教の中に、身を以って飛込んで、膚で感じて、夫々の宗教が与えるものをとらえようとした。

生きていたら、元伊勢にも来てもらいたい人だった。

神が生きている。いや、住んでいると云ったのかも知れない。私は、廿一ケ国、七十五都市を、百五十日で廻るというスピード旅行をした。案外、見るものは見て来たと思っているが、忙しいので、無けなしの財布をはたいて、本

や、資料を買いあさった。その中に、"Hier Got hat gelebt" という厚い一冊がある。私は、沙漠と、ユダヤ・キリスト教との関係に関心をもっていた。いい参考資料だと愛蔵しているが、この本の題名と、ハイラーの言葉とをくらべると面白い。「神が生きていた」というのと、「神が生きている」と云うのとでは、大ぶちがう。「日本美の再発見」の著者ブルノー・タウトは、日本建築から学んで、ヨーロッパに、建築革命を起した。彼は、神宮と、ギリシヤのパルテノンとを、世界の二大代表宗教建築だと称讃し、一方は、今も生きて居るが、他方は過去の遺蹟というのとのちがいがあるとつけ加えた。

元伊勢には、二千年も前の但波乃吉佐宮のたたずまいが、生々と生きている。確かにここは神の坐ます所である。確かに。

神宮は国家の力で守られ、全国民の奉賛によって支えられて来た。社構や規模の広大さに於いては、勿論、比較を絶している。しかし乍ら、ここの森の厳かさ、神奈備にあふれる神秘さは一味も、二味もちがっている。決して、見劣りはしない。よくも、土地の者の手だけで、これだけのところを守りつづけたものだと誰しもが驚く。

遠く、遥かな、太古を無垢の姿で残している。西行は法師である。法師は、今、我々が参拝させて頂く、板垣御門の前までは行かせてもらえなかった。島路川の向うの僧尼拝所で拝んだ。「何事のおかしますかは知らねども」は、そんな所から、遥かに拝んでの歌である。何も見えない。わからない。その状景が詠まれている。

それでも、西行は、全身で、神威の厳かさ、神徳のただならぬものを感じとり、太神宮の魅力にとりつかれて、伊勢の地が離れられなくなった。生涯をこの地で過ごした。その気持は、手にとるようにわかる。

元伊勢の宮山には、西行を感動させたものが、そのまま残っている。それがないようでは、元伊勢だ、但波乃吉佐宮神蹟だと云っても云うだけだ。

幸いに森が残った。

生き証人が、この森である。森を見よ。森に聞け。文字に書かれたものがそれほど尊いか。生きている太古がつまらぬか。黙って拝んだらハッキリわかる。

どう見ても、ただの所ではない。何もなくして、これだけの森は残らない。夢でも、幻でもない。これだけのものが残った。偶然などである筈がない。残るべくして残った。守らるべくして守られて来た。

そこを、学者が見落していた。

文献、文献と、文献にこだわって、見るべきものを見なかった。畏れ多いというべきだろう。

学者の陥りやすい大きな盲点があった。

えらい学者も来ている。栗田寛、吉田東伍などの名は知らぬ人はない。御巫清直は、伊勢の神職で、五部書をはじめ、実に、綿密な研究を残した学者だった。そんな学者たちが、手も足も出なかった。

この神社は、昭和五年まで、一介の村社だった。不思議な様だが、こんな学者達がかかっても、わからないというのでは致し方がない。

ロ、宮地博士の目

宮地博士は、昭和五年に、ここを府社に昇格させる為めに、現地調査をした。

その前に、真名井論争の論社は、みんな見ている。中郡(昔の丹波郡)の伊去奈子岳の麓にある鱒留の藤(社)神社や、同じ五箇の久次の式内社比沼麻奈為神社も見ている。宮津の籠神社の摂社の真名井神社も、無論、何度も見た。舞鶴の笑原神社も見た。笑原神社を迂祀したという文殊の橋立明神も見たと思う。

見るべきところは、必ず見る学者だ。

夫々、熱心な支持者があって、血を吹きそうに熱をあげていた。激しい請託の争いには、閉口したらしい。

そんな中で、元伊勢両宮の実地検証に来た。神域に足をふみ入れると、宮地博士は、思わず唸った。「ウーム、小

野君、これはいける。」そう云っただけで、アトは何も云わない。小野君というのは、私の岳父、小野常吉である。常吉は、若い頃、古事類苑編纂所で、博士と机を並べた間柄で、親交があった。

だが、そんな事で、いい加減なことを云うような宮地博士ではない。きびしい事天下無類で知られていた。学問の上では、絶対に妥協しない。博士を知る人なら、よく知っている。

無論、宮津藩主の崇敬資料は、一応、昇格の条件になる。だが、そんな事ではない。第一印象で、「いける」と云った時に、及第と判定した。一目惚れだった。宮地博士が、そんな事をした話は聞いた事が無い。

博士は、確かに、考証にはやかましかった。しかし、文献一辺倒の固い頭の持主ではない。考古学にも、民俗学にも、深い関心をもっていた。文献考証に限界のある事は、十分にわきまえていた。神社の考証の為めには、建築、建造物、宝物、絵画、彫刻、古い遺物、遺跡、環境、集落、河川、道路と何でも研究しなければならない。そんなものが、みんな文献に書かれている筈が無い。狭い頭では、考証は出来ない。考証というより、鑑定の方が重要な場合がある。文献といえども、鑑定が必要である。大正、昭和を通じて、一代の碩学として鳴らした博士は、積極的にいろいろな学問を参照し、採用し、駆使しようとしていた。

博士は、全国の神社を知っている。考証課長という地位があったから、秘中の秘まで拝観することができた。いろいろ秘話がある。

神奈備についても、当然、全国を見て居られる。禁足の森も沢山見て居られる。私でさえ、神社本庁に関係していたから、全国の有名無名の神社に参拝し、大ていの所は見せて頂いた。禁足の森の中も見せて頂いた。神職しか入れない禁域まで入れて頂いた。だから、人の入らない禁足の原生林が、どんなものか、この目で見て知っている。

沖縄のウタキは、男は入れない。しかし、大学教授で、文学博士で、専門の研究家だと、特別扱いをしてくれて、女人だけが集って行う秘密の祭場まで見せてもらった。そういう経験を通して、物を見、物を考える事が出来る事

を、深く感謝している。

宮地博士は、私などより、遥かに多くを見ていた。遥かに多くを知っていた。学者の、透徹した鑑定眼で、「間違いなし」と踏んだ。だから、「いける」と口走ったのだ。

不敏ながら、私も、私なりに見る目は持っているつもりである。その目で、この神社の森を見た。ハッキリ手ごたえをつかんだ。

博士のつかんだものがわかる。

問題はそれからである。何故、こんな所が残っているのか。どうすれば、ここが但波乃吉佐宮の神蹟だと云う事実を証明する事ができるのか。

信仰としては、これだけの手ごたえで、本当は十分なのである。然し、人々は、やはり、何故だろう、どうだったのだろうと問いかけて来る。学者、研究者は、それに答えなければならない。

宮地博士は、一体、どういう考えを抱いていたのか。博士の事だ。しっかりしたものを持って居られたにちがいない。片端でも聞いて置きたかった。

私は、考証学者ではない。しかし、神道学を専攻した上、今は宮司である。いつ迄も、黙しては居られない。難しいと云って、避けては通れない。起ち上る他はない。わかるだけを、勇を鼓してまとめて置きたい。

ハ、三つの力の存在

私は、こう思う。これだけの場所が、こんな形で残されて、守られて来たのには、当然、それ相当の理由があるにちがいない。しかも、可成り近世になるまで、地方にさえ、資料を残していない。だが、これだけのものがある。無いなら別だ。とすると、三つの力がはたらいて来た事になるだろう。

1　信仰の強大性　当然、何でもない所であった筈はない。非常に強い信仰があった。広く、人々を集めるような

信仰ではなく、逆に、非常に閉鎖的だったのかも知れない。だが、質的には、つよい、生々とした信仰があった。その信仰が、ここを守った。

これは、誰でもが感じ取っていると思う。

2　人の支え　ここを守った人々がいたにちがいない。信仰の力だったとすれば、信仰を持つ人々がいて、その人々が支え、且つ守って来たと云うことになる。

そして、この人々は、ここの信仰の質によるのか、閉鎖的な状態を維持する力があったのか、何らかの手段方法によったのか、或は、周囲の人々の支持によってか、納得を得ることを得てなのか、いずれにしても、非常に閉鎖的な状態で、ここを守ったのだろう。

3　「秘」の力　ここで、一番大切なものは、秘密だったのではないか。日室岳は、今日に至るまで、禁足が守られている。それが、もっと広く、内宮の宮山や、その周辺まで、或は、もっと、大江山を中心とする広汎な山々にわたって、禁足地であったと云う事も考えられる。それは、決して、突飛な考え方ではない。

信仰には、常に、秘の要素が伴う。殊に古代人は、秘を大切にした。それが、異常なまでに強くて、長く保たれて、ここを、全く世に知られざるまま保ちつづけたのだとも見られる。

全く、外部のものを入れないだけでなく、語ってもいけないという信仰は、実は、今でも、方々に生きている。語ったら、生命を失うというタブーが生きている例は、私の知る限りでも、可成り多い。

或る神社の神事などは、禰宜が諸員を率いて奉仕するが、宮司にも教えない。神事を行う場所はある。名前もわかってはいる。私も、そこは知っているが、何という神がいるのやら、誰も知らない。知ろうともしない。山の中に、小塚があるだけで、常人は近寄らない。土地の人は、その存在を知っているのだと思うが、参拝などはしない。

神聖なところは、語ることさえタブーである事が珍らしくない。語るタブーが完全に守られたとしたら、誰にも存在が知られないのが当然である。

後世になると、有名病が蔓延して、学者までが、狂った価値観でものを見たがる。これだけのところが古記実録にも記されずに残ったのは、「秘」のタブーが堅く守られた証拠とも云える。実は、稀有な、スバラシイ事なのかも知れない。

抽象的に、こう云って見ても、解決にはならない。今述べた理くつは、理くつの為めの理くつかも知れない。事実だと認めろなどと云っても許される事ではない。しかし、やはり、角度をかえて、見直す必要がある。何もわからぬ方が、尊いのかも知れないと云う見方も、あってよいと思う。

千五百年、二千年前の価値観が近世まで生きつづけていたとしたら、異例の中の異例だろう。しかも、山奥だと云っても、まるっきり交通が無かった訳ではない。人は、可成り近い所にも住んでいた。わからぬのを不思議に思うのは道理である。だからと云って、世間並みでなければならんと云うものではあるまい。他所にない事があってもよい筈だ。

後世の色眼鏡で見てはなるまい。サッパリ、後世的価値観をすてて了って、昔の人の物の考え方、生きざまに参入する必要があるのではないだろうか。

難しい事のようだが、民俗学の発達によって、今日では、古代の人々の信仰は、現代の我々の価値観とちがったものである事が、もう常識に近いものになっている。宗教学者も、同じ目をもっている。神社研究も、後世的価値観にしばられて居てよい時代ではない。

㈡ 福榎（戊亥の大榎）の話

妙なことが、吉見幸和の「五部書説弁」に書いてある。幸和は、五部書偽書論の最高権威で、皇太神の丹波迁幸

も、従って、但波乃吉佐宮についても、全く否定的である。否定も否定、全面否定である。或る人が、幸和に、丹波吉佐宮は、國中の戌亥(西北)にあって、大榎があった、その為めに、戌亥にある榎を福榎というようになったという話をした。幸和は、それを馬鹿々々しいと否定している。

私は、何かに、吉佐宮に大榎があって、そこに、皇大神の神霊がかかったと書いてあったように記憶している。何にであったろう。捜して見たがわからない。私は、ひそかに、その伝えは、案外、古い時代の真相を伝えているのではないかと想像し、仮説を立てて見た。

諏訪大社の下社では、一位の木が御神林のようになって居る。拝殿のところに「ネイリの松」がある。「寝入松だ、深夜に拝殿を枕に寝入る松だ」と伝承されているが、実は「勿入(ない)りの松」だと思う。この松から中は、禁足地になっていたのだろう。

沖縄の久高島のノロだけが入るウタキの森の中を見せてもらった。一寸広く開けた所があって、そこに、棕櫚に似た低い木が二三本あるだけだった。そこが神の降るところで、ノロやユタが集って秘密の祭をする。

元伊勢は、古いところだ。社殿などはなくて、大榎があって、その木に神霊の降ると云う古い古い信仰が残っていて、誰も中には入らなかった。そういう古代信仰が、後世まで生きていた。神社とはちがう神奈備が昔のまま残った。非常に遅くなって神社としてデビューした。これは、仮説である。

この話をすると、総代の佐藤高平氏が、「そうですか。私は祖父から、内宮さんの御本殿の棟は榎だと何べんも聞きました。」と云った。佐藤潤次郎氏が、「私は、西側の棟持柱だと聞きました。」と云った。この仮説は正しいらしい。

(三) 五部書を見直す時——八ツの問題——

私は、この十年間、森の声に聞いて下さいと答えて、なるべく大切なことにふれる事を避けて来た。

附近に、宮津の籠神社がある。終戦とともに元伊勢の看板をかかげ、積極的に宣伝をはじめた。先方は地の利を

得て居る。一時は、人々がそちらに集った。今は、当社に参拝者がかえって来て、どういう関係かを問われる事が多い。他社については語らぬのが作法だと答えを避けて、森に代って答えてもらった。

社頭の整備に全力を尽し、お蔭で、元伊勢の名に恥じない状態に近付け得た。参拝者は日に日にふえて来た。

だが、学者神主が、それだけでよい筈が無い。私は、はじめからやり直せ、考え直せという、学問の常道を踏む事にした。

◇　◇　◇

本居宣長が、やかましく教えた事は、師の説に泥(なず)む勿れという事だった。儒教の影響で、兎角日本の学者は、師曰くになり易い。学問は自由でなければならない。自ら検証して、採るべきものは採り、捨てるべきものは捨て、前進しなければならない。師の説と云えども、誤は誤だ。自由にして、新らしい研究をしてこそ学問は発達する。あの時代の学者として、大へんな卓見である。

私は、哲学を専攻した。疑って疑って、疑うを得ないものから考えるのがデカルトの方法だった。先入観や独断を一切すてて、完全に客観的立場に立とうとするのがカントの批判哲学だった。

私は、そういう先学のすぐれた考え方に影響を受けた。だから、先学の説にとらわれずに、全く自由に考えた。

第二に、いろいろの立場から、方向から、ちがう方法論を以って、いろいろに考えて見なければならない。自由に考えることは、いろいろ可能な解釈をして見るという事である。犬も歩けば棒に当るではいけないが、百でも千でも、考えられるだけの事を考えて見て、証明し得るものを見つけ出すのが近道である。

しかし乍ら、いくら、いろいろ考えて見ても、棄てる事を知らなければならない。脈のある考え方と、脈のない考え方とは、論理なり、見識なり、勘なりで識別し、選択し、批判し、整理し、しぼってゆかなければならない。

古事記にも、日本書紀にも、風土記にも、万葉集にも、平安初期の文献にも、延喜式にも、思わしい証拠が無いと

なったら、どうしたらよいか。神道五部書の再検討をする他はない。

◇　◇　◇

ところが、五部書は、吉見幸和の五部書説弁以来、偽書という折紙がついて、この考が定着している。五部書偽書説が定説になると、どうしても、それにとらわれる。見えるべきものが見えなくなる。

尤も、口ではそう云えても、どこをどう見ればいいのか、そこが簡単にはわからない。無理もない事だが、それではいけない。今日までの元伊勢論は、残念ながら、そこを十分考えていない。

五部書は明らかに偽書である。偽書たることの証明は、幸和の説弁に尽きている。説弁は名著だ。私も、敬意を表している。しかし、偽書だからと云って、一つも古伝はない、全部つくりものだと云うのは暴だ。正伝もある。訛伝ではあっても、無視出来ないものもある。どこかで、何かの関係で、変化したものもある。平田篤胤のように、伊勢神道は一種の両部神道だと云える部分もある。記紀の如き正書から採って来たものもある。一種の神学から生まれた解釈や、伝承もある。一つ一つを、みな正伝だとは云えない。だが、どれも、皆、無価値なのではない。夫々に、それなりの意味もあり、理由もある。ところが、今日まで、正しく評価する面でのテキスト・クリテークは甚だ進んでいない。そこが大きな盲点である。

私は、五部書を仮名混じり文に書きおろした。一冊の本の中に、記紀の文体もあれば、宣命体もある。漢文体もある。偽書らしいと今更ら肯く所が多かったが、こんな拙劣な、掻き集めをして、文体、表記を統一していないのを、単紙に馬脚をあらわしているのだと断じてはなるまい。そういう形の文書があった、そのままにまとめたとすると、マゼコゼになる。マゼコゼ文章は、案外、正直に古いものを伝えている事の証拠となる場合があろう。

大上段の構えでいえば、重大な皇大神の御神勅まで、偽書だから出たらめだ、つくり事だでは納まらない。度会氏がそんなものまで偽作して通る筈はないのである。

神宮では、五部書によらないと、外宮豊受皇大神宮の御由緒は、無くなってしまう。だとすると、丹波国から迁祀したという伝は、非常に大切である。

それにしても、何故、丹波国から御饌都神を迁祀せねばならなかったのか。創作しようと云うつもりなら、天から降ったと書いた方がよい筈だ。現に、止由気太神は、天から吉佐宮に降って、一処雙坐して、皇大神が大和におかえりなると、自らも、天に登ったと記されている。ややこしく、真井原に鎮祭されている止由気太神をお迎えしなくても、直接、天から伊勢にお迎えした方がサッパリしていて、尊くもあろう。余程の事が無いと、遠い遠い丹波国の、後世の人が、何処だ、此処だと騒ぎまわるような所から来られたなどと云う必要は無いだろう。丹波から来られたと云う方が、天から降られたというよりも、真実で、有難くて、無理がないという事情が存在したのでないと話の筋が通らない。

真名井の水にしても、御饌の稲にしても、丹波でなければ、何故いけなかったのか。五部書の中にも、天孫降臨の時の真名井の水の話がある。どうでも、丹波の真名井からでなければいけないというのは、何か理由があるにちがいない。山國の丹波が、一番いい稲作の地で、止由気太神や、豊宇賀能売神のような、稲や神酒の神が丹波から来られないといけなかった理由も、考えて見なければならない。

吉見幸和流に云えば、五部書は度会氏が、わが奉仕する豊受皇大神宮を、内宮と同格、又は内宮以上に持上げようとコジつけた偽書だという事になる。止由気太神を国常立尊だとか、天御中主尊だとか云っている所は、そういう印象も受けるが、丹波の与佐之小見比沼之真井原に祭られた、もう、天に登ってしまわれた止由気太神の御霊代を迁し祭ったというと、どうして、度会氏の株が上がるのか、説明はつけ難い。別のポイントから見ると、幸和の説には矛盾がある。

私は、こう思う。止由気太神の迁祀に当って、丹波道主命だの、氷沼道主だのという方の子孫がお伴をして、伊勢

に来て、大物忌父（おおものいみの）だの、御炊物忌父（みかしぎのものいみの）だのの祖になっている。崇神天皇の御代の丹波道主命の苗裔が、雄略天皇の御代に伊勢に来た、素盞嗚尊の裔、大国主命、大己貴命又は粟皇子神だという氷沼道主の苗裔が、大佐々命や大若子命と一緒に伊勢に来て、御炊物忌父となった。丹波道主命は兎も角、神格をもつ氷沼道主が、崇神の御代に豊受大神の祭祀に奉仕したという事は、一見、メチャメチャな話のように考えられる。だが、そこが問題だろう。

誰でも、変だなと思う様な話を、態々、有難そうに書く事もあるまい。そんな事を書くと、どれだけ止由気太神に箔がつくというのか。度会氏の株が上るというのか。話は逆だ。何もかも、捏っち上げよう、よく見せようとしたというなら、こんな割の悪い話はつくらない。

大物忌父や、御炊物忌父は、度会氏と比べると地位は低い。だが、大御饌祭には、欠くことの出来ない神聖無比の家職である。それで通っている一族の伝承を、上官なりと雖も度会氏が勝手につくりかえる事は出来ない。許されない。逆である。度会氏が、下官の大物忌父や御炊物忌父の伝承を尊んでこそ、物議は起らず、丸くおさまる。

一見、変なようだが、変に見えるままに伝わっている所が重要だ。却えって、こう云う所に、大切な事がかくれている。小賢（こざか）しい、小智恵で判断すると、見逃してしまう。

寡聞にして、ここが大切だぞと、声を大にした人を知らない。

こう考えると、止由気太神を丹波から迎えたという伝承も、度会氏が創った話ではなく、伝えねばならぬ必然性があった筈だという事になる。

一体、伊勢にいて、机の上で考えて、氷沼道主などと云う名を考え、それを、大国主命だ、一名大己貴命だとフィクションの輪をひろげて行ったとすれば、余程、変っている。こういう構想は、丹波の現地産で、それを、止由気太神迁祀と共に、伊勢にうつして来て、その古い伝えが、多少、おぼおぼしくなり乍ら、伝えられていたのだと考える方が自然である。

私は、先人の考えた事の無いことを、もう一つ考えた。それは、祭式である。後世の人間には、想像もつかないような意味で、一子相伝の神役をつとめた。他氏の者にはやらせない、兄弟にも伯父・甥にもやらせない、たった一人の後継者が役を引きつぐ。名も引きつぐ。世襲し、襲名する。しかも、神になる。神になり代る。氷沼道主はそういう方だった筈である。昔は、そう云う事があった。それが、忘れられがちである。現人神とか、神人とかいうものが忘れられているが、五部書には、そういうところを押さえないと、わからない所があるのだと思う。

私意をはさまないで、五部書が何を云っているのか、特に、何か辻褄の合わぬ妙なことを云っているように見える所に注意して、主張の要点をハッキリとらえて、古代の人の物の考え方、やり方に近付いて行くべきだと思う。要約すると、次の六点が主要問題となる。

1　与謝（与佐之小見）と吉佐宮との関係
2　豊受大神の神格
3　氷沼道主（比沼道主）の正体
4　与佐之小見比沼之魚名井原
5　真井石井と水戸神
6　祭式と祭祀体制

先学たちは、こういう問題を整理し、突込んで考えようとはしなかった。

7　比治か、比沼か

この問題に対しては、従来、誤写説がはばをきかせて居た。比治か、比沼かのいずれか一方にしぼるべきだと考える人の方が、圧倒的に勢力が強かった。（丹波郡式内比沼麻奈為神社の関係で「比治」説が優勢）

私は、丹後風土記残欠により、「伊去奈子岳＝比治山＝豊受大神祭祀の発祥地」という方程式は動かし難いと考え

ている。然し

8　比治山と比沼は別である

という両立説を考える余地があるのに、先人が、これを見落して来たのは欠典だと思う。

理由は簡単である。伊去奈子岳は、「中郡＝旧丹波郡」にある。「与謝」又は「与佐之小見」とは結びつかない。「与謝」又は「与謝郡地方」は、比治には関係が無い。こちらは、比沼や氷沼道主（比沼道主）を考える可能性が圧倒的に大きい。

この考え方は、大切である。

もう一つは、方法論である。私は、文献もない、考古学、民俗学等でも近付けない場合に、地理学的考証という新らしいメソドロジーをつかって見る必要がある事を提唱して来た。ここでも、それを使って見たい。

㈣　地理学的考証

イ、地理的社会的環境

地理学的考証というのは、言葉としては新らしいが、方法としては、必ずしも新らしくはない。

私が、特に注意して見て来たのは地形である。地勢と云ってもよい。

大きく見れば、環境とか、風土とかも関係するのだが、地形や地勢は直接に生産や居住や交通や、いろいろの生活条件を左右し、そこに発生する諸の変化や現象に、必然的関係をもっている。従って、全く文字に書かれない事実を雄弁に語ったり、いろいろな発見や考え方にヒントを与えるものである。

私は、かつて、神社の地理的、社会的環境という論文を書いた。神社を次頁図の如く分類する事により、夫々の神社の性格を明らかにし、又、社会の変化に伴う神社の変遷史を解明してゆく事ができると思う。

元伊勢の場合、山岳性兼森林性隔絶型が本来のタイプで、後に、ある時期から、離在型が加わったから、隔絶性離

- 神社
  - 隔絶型神社
    - 山岳性隔絶型神社
    - 島嶼性隔絶型神社
    - 岬性隔絶型神社
    - 森林性隔絶型神社
  - 離在型神社
    - 隔絶性離在型神社
    - 内在・離在型神社
  - 内在型神社
    - 円心性内在型神社
    - 外廓性内在型神社

在型神社になった。だが、離在型の方が強くなると、隔絶型の方が少しボヤケて、観察者の目を曇らせるようになってしまったらしい。

今日では、元伊勢では、日室岳だけが神の降臨する山として、厳重な禁足を守られているが、本来は、その周辺はもとより、皇大神社のある宮山も、恐らく禁足地だった。それが、一木一草も傷つけてはならぬ伝統となって、今日まで、あの、全国にも類のないほどの森を護持しつづける事になった。

それを、宮山だけだと考えるのは、現状にとらわれた見方である。大江山の千丈ヶ岳を中心として、大江山山塊の全域、恐らく、天田内の豊受大神社のある附近までが、人の立入る事を許されない聖域であったと考えるべきだと思う。

証拠まであげていう事は、今は控える。それなりの理由はある。

私の云う隔絶型というのは、人が入られないか、入らせないか、いずれにしても、余程特別な、神に許された者以外は入らない聖域に鎮座している神社だったという事である。

離在型というのは、遠路参拝して来る神社という意味である。

皇大神社の場合、もともとは、全域が聖域で、人の入られない隔絶的信仰地の一角にある特別聖域だった。吉佐宮の名が残っている位だから、建物を建てた時代もあったにちがいないと見た方がよい。こういう所は、建物もない、樹木か石が目じるしで、神木とか、磐座とか、磐境とかいうものしか無いという例が少くない。そういうものだったと想定したら、当らずとも、遠くはあるまい。

ロ、神秘なる相関と配列

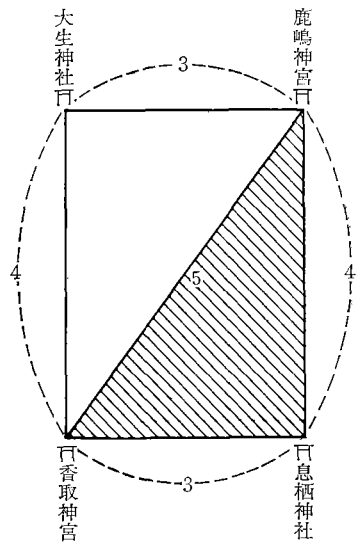
太古に於いて、いろいろ神秘な形や、現象が出て、それを以って占いをする兆を麻知という。土地の関係でそういうものがある。

私は、まだ、十分に研究していないのだが、幾つかの神社や霊場が、いろいろな神秘的関係によって配列されている事に気付いている人は少くない。専門家が、もっと留意し、多数の例を集め、専門的研究問題にしなければならぬと思う。

私は、ずっと前に、鹿島神宮、香取神宮、息栖神社の三角配置に、神秘的なものを感じた事がある。息栖神社を知る人は少いが、日本書紀を見ると、どうしても、岐神の神社が無ければならない。私は、長い間、どこかにないかと捜していたが、偶然、通りかかって、何気なく参拝すると、息栖神社と云って、これが、尋ねに尋ねていた岐神の神社だった。

息栖という名は、今は、一面の砂地の松林になっているが、もとは、利根川が、霞浦を貫いて、太平洋に水を流すから、沖に形成された洲であった事を示している。間歇的に増減する真水の井があるので、不思議がられて来たところだった。

私は、最初、この三社が、二等辺三角形に配置されているように思った。私の計算ちがいか、地図がよくなかったのか、最近、二十五万分一地図で測ったら、各辺が3:4:5の三角形だった。どうやら、潮来(いたこ)町の大生郷の大生神社を合せ



た四社が、図のような長方形に配置されているらしい。

私は、この地理的配置に興味をもった。何か神秘的な意味はないだろうか。それは、今でも、脳裏をはなれないでいる。

ところが、今度、私は、与謝里から、元伊勢、伊勢と、三点を貫ぬく不思議な線を発見した。これは、私の吉佐宮研究上、大変重要な意味をもつものだった。私は、この神秘的な線に、「吉佐宮日出の奇麻知」と云う名をつけた。内容は、後刻、改めて述べたい。

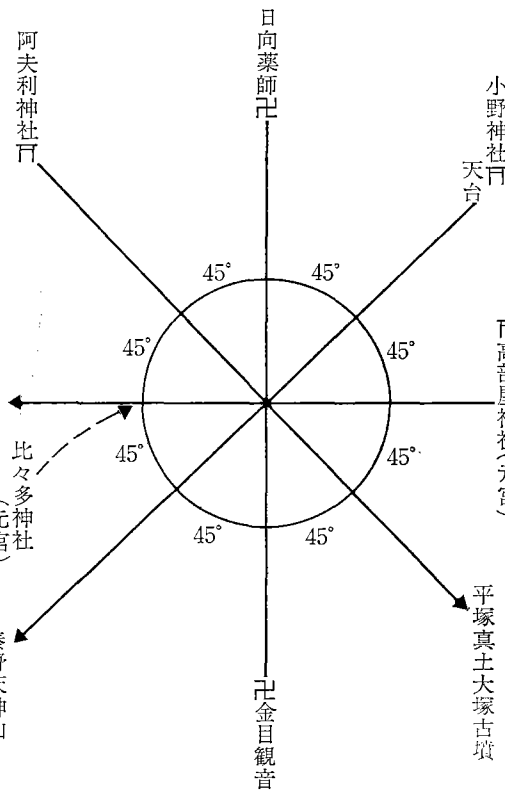
「神風串路」と呼んでいる人があると教えてくれた。こういう現象は、やはり、他にもあるのだそうだ。

この話をすると、衣川万里氏が、こういう線のことを、

私は、元伊勢で、ある特別な意味を読みとったので、普通名詞をつかうのを避けて、固有名詞をつけて、話を進める事にした。

この神秘な線の発見について話すと、佐伯真光教授が、向井毬夫、石川邦夫共著「古代相模の方位線」という好著を貸して下さった。こういう事を、熱心に研究して居られる人々がいる事に驚いたり、敬意を表したりだが、私は、何となく、神秘的な方向、配置、或は関連があるように感じていただけで、研究した事がない。

向井、石川両氏の研究は、方位ということに関心があるようだった。88頁に、次頁に示した挿図がある。私には、この図にあらわれた社寺古墳の関係がどういう意味があるのか、或は関係があるのかわからないが、面白いことがあるものだと思う。



比比多神社旧ラチメンよりの八方位図

両氏は、方位や測量に興味をもって調べられたらしいが、私は、「吉佐宮日出の奇麻知」が、与謝から、東南東に向って居り、冬至の日に太陽を祈る方向であることに、古代の太陽崇拝上の意味がある事を大切だと考えた。

向井、石川両氏の研究の中にも、冬至・夏至の方向に、神風串路が存在する例がある。

大山阿夫利神社と寒川神社とを結ぶ線が、冬至に太陽ののぼる方向で、その線上に、多数の社寺が存在している。相模国分寺と金時山を結ぶ線が、夏至に太陽の没する方向で、この線にも、ある程度、社寺が位置しているようである。この調査で、どんな決定的意味が読みとれるのが、この図の冬至線は、何かありそうな感じを与える。

軽々には、物が云えないが、こんな側面から考えて見ることは、必要な事だと思う。

ハ、地形が語る秘史

秘形の麻知は、大へん神秘的な場合が多い。元伊勢の「吉佐宮日出の奇麻知」は、宗教学的に見ると、古代太陽崇拝の原則に叶っていて、集めたら、類型は多いのかも知れない。

神秘的な意味もあるのだろうが当然、あるべくしてそこにある、そこにない方がどうかしているというような、ごく納得し易い条件なり、必要性なり、何かの関係なりが存在していて、ああ、なるほどと肯けるようなケースが沢山存在するのだと思う。

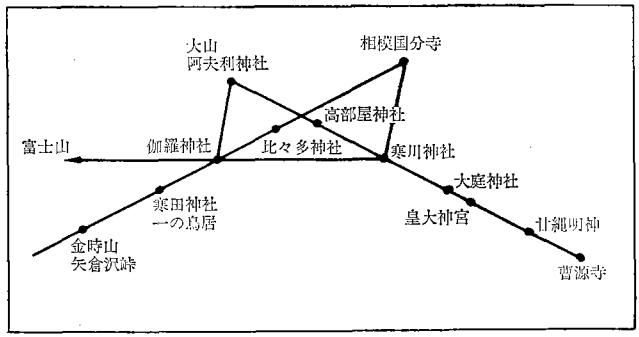
これも、多数の事例を十分に集めて、よく研究して、地理学的考証学という一学域をうち立てる必要がある。必ずしも、大へん難しい仕事ではないかと思う。

私の研究したのは、それほど多くはないが、思いの外、わかりよくて、中には、無限に近いほど、古代の状況がわかって来て、秘められた歴史が白日の下にさらされるが如き感のする例もある。

長野県の飯田市の近傍に阿智神社というのがある。私は、神楽歌の阿知女作法に関係する神社だと見て研究したが、阿智という地は、中仙道から恵那に出る嶮路の咽喉を扼する要衝で、ここに斎部氏が天表春命を祭ったことは、想像も出来ないほど、重要な意味を持っている。

式の広瀬神社の祝詞に、広瀬の川合に坐す若宇賀能売命とある。私は、広瀬の名と、川合の名に興味をもって、現地を調べたが、奈良盆地は、大和川断層によって生じた特別の平野で、殆どすべての河川が、大和川に流入し、広瀬神社の附近では、高陵町の丘陵に妨げられ、大和川に逆流する形で、曽我川、飛鳥川、葛城川の三川が、並流して大和川に注いでいる。そこが広瀬で、大水害地帯をつくっている。

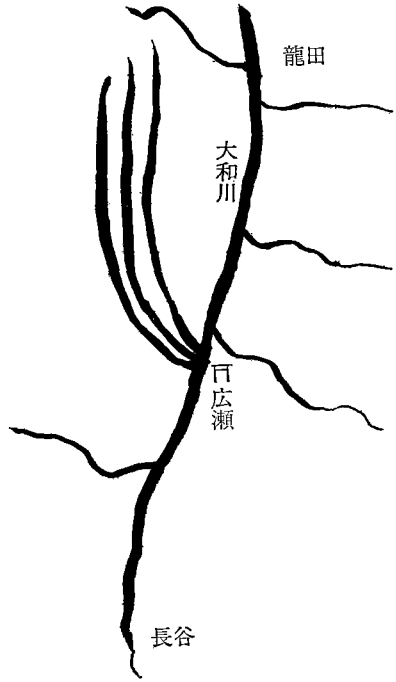
そこに祭られたのが水の神の広瀬神社である。これと並んで、天武天皇の時代に祭られたのが龍田大社である。こ



夏至・冬至の日の出・日の入りの方位線

の神社も、大和の風害の大へんな要所に祭られていた。

両社の地理学的研究は、大和平野の農耕文化の発達から、法隆寺の創建など、蘇我氏の経済力、政治力を解明する上に、欠かせない書かれざる歴史を語っている。（若宇賀能売神と豊宇賀能売神とは、信仰的に同系の神である。稲と水とに関係がある。蘇我氏、葛城氏は丹波・丹後と関係が深い。丹波の稲作と大和の稲作の関係を示唆している。）



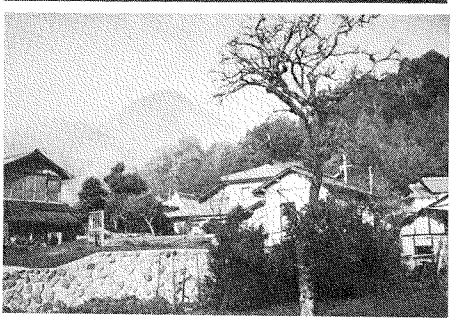
今、ここで、多くの例を語っているいとまはない。

元伊勢の場合、一見すると、丹波・丹後の山又山に囲まれた過疎地にあり、歴史も文化もないところで、何の変哲も見られない。神社は、府社というのが恥かしいほどの社構で、森ばかりが深くて、神々しい。何かあるだろうとは思うが、周辺地区が余りに貧弱で、とても、こんな所へ、皇大神が迂幸されたなどとは想像もつかない。これが、大方の感想である。

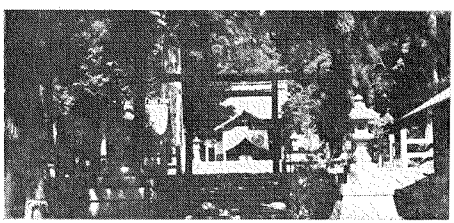
然し、それは、浅薄な、表面的な見方だろう。地理をよく観察すると、ここも亦、思いがけない条件をもって居る。決して平凡ではない。私は、文献に出て来ないものを、その地方の山や川に語らせる事によって、思いがけない消息を知る事が出来ると思う。

元伊勢研究にとって、地理学的研究は必要欠くべからざるものである。考えると、この土地ぐらい特別な地理的条件をもった所は、ザラにはない。並みなところではない。

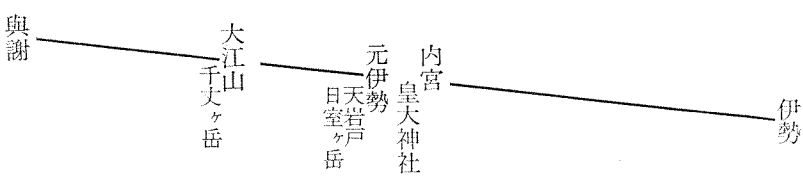
大江山より元伊勢日室ヶ岳を見る（東南東）

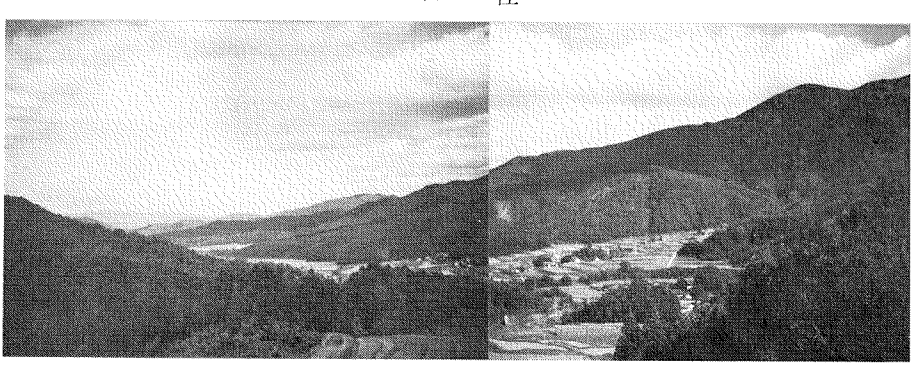


内宮より日室ヶ岳（西北西）を見る



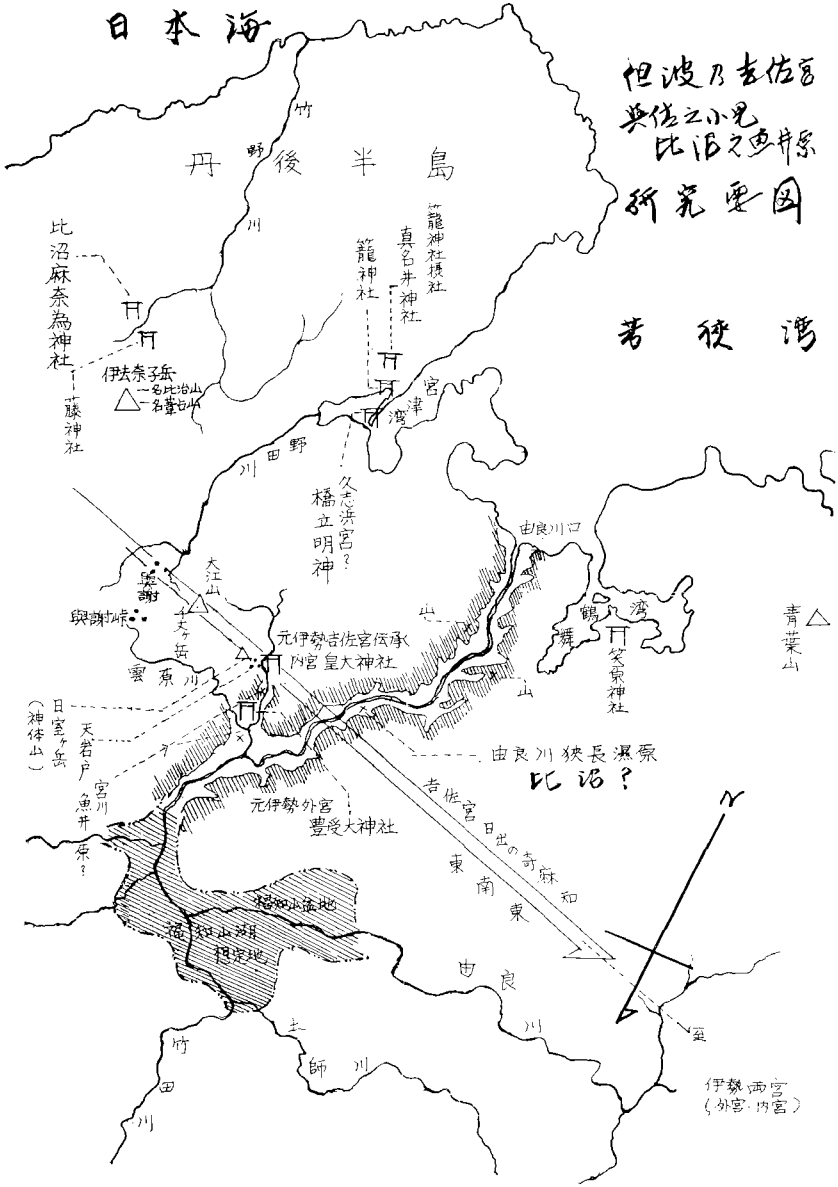
元伊勢　皇大神社
（大江山の東南東）





與謝（西北西）→ 千丈ヶ岳（大江山）（東南東）

但波乃去佐宮
與佐之小見
比沼之真井系
研究要図



そういう事に気付いた先学が無く、それを元伊勢の歴史の解明に役立てた人もいない。頭から山國だ、僻地だと貶視して、大切なものを見落して来た。

大江山は、住む人も少く、一地区は、平家の落人だという人々が、自ら外界との交流を絶って、七百年もの間、閉鎖的生活をつづけた。一地区は、仏性寺と云う。修験者どもが住みついて、百姓村をつくったのであろうか。

斜面の、石ころの累々と出て来る山畑を耕している。そんな姿を見ていると、二千年前の大江山が想像されて面白い筈だが、今の人には、却ってちがったものしか見えないらしい。

元伊勢研究には、本当の地理を見る目が必要である。

そして、その地理的条件から生まれて来る二千年前の、この地の人々の生活を想定し、そこが、大陸の影響を受けて、新らしい文明をもつに至った人々の生活と、どれだけ、どうちがったか、又、開けた土地の進歩発展と、こういう土地の変化や進歩の仕方とのちがいも考えて見なければならない。

又、一口に神社と云っても、実は、いろいろである。ここが果して、世間並みの神社だったか、神社以前と、神社だと思わないほど、古い、形のちがったものだったか、比較しながら考えて見なければなるまい。

地理というものは、そういう所まで、我々を深く入りこませる説得力を秘めていると思う。

元伊勢を知らんとせば、森を見よと云ったが、今度は、更に、元伊勢を知らんとせば、地理を知れを付け加えたい。

（つづく）